

## 「知識労働者」の類型

企業経営漫談士 岡野実空

人工知能の急速な発達で、先行きが危ぶまれる「ホワイトカラー」の地位。それにいち早く警鐘を鳴らした図書の一冊は、酒井崇男氏の『「タレント」の時代』（講談社現代新書）です。氏のいう「タレント」とは、「目的志向」で「知識を獲得」、「組み合わせる」を活用し、「創造的知識労働」をする人たち。すでにこのコラムで取り上げた、「スペシャリスト」や「プロフェッショナル」より高次元の存在です。

今回のコラムは、AI 時代に必要な「ホワイトカラー」の条件を見直し、ミドル層が生き残るための心構えや行動を考えます。

### その1: 改善ワーカー

酒井氏のいう「改善ワーカー」とは、特定の分野の知識をもち、定型労働の「改善能力」を有する労働者。その存続の条件は、まず関わる事業の「継続性」です。しかしその代表であった自動車業界も、最近の EV(電気)や FCV(水素)の登場で環境が一変し、ガソリン車の「改善」一筋で来た各社は、本業の継続性へ危機感をあらわにしています。

また自分が関わる業務の「特殊性」が高ければ、「改善能力」で生き残っていく余地は大きいといえますが、AI のレベルアップは目覚ましく、各業界で徐々にその領域を侵食し始めています。

その意味でいま、「改善能力」は「知識労働者」として生き残るための必要条件の一つにすぎないという認識が求められています。

### その2: スペシャリスト

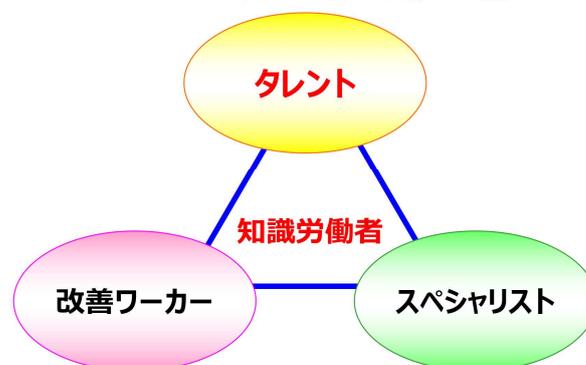
氏のいう「スペシャリスト」とは、複数分野の専門知識をもち、特定の分野に詳しい定型労働の専門家。製造業でいえば、既存製品の開発に携わるエンジニアの多くが該当し、その熟練者を「エキスパート」と呼んでいます。

いま AI が代行しようとしているのは、このうち反復性の高い分野の「知識」。「汎用」「特殊」を問わず、それが生む価値に比べ、必要とされる費用が割高と考えられるようになったからです。例えば、「給与」や「会計」などに関わる業務。単なる計算に続き、判断が不要な業務は、すでにアウトソーシングが当たり前になっており、社内の「スペシャリスト」だけでなく、外部にサービスを提供する「プロフェッショナル」の地位を脅かしています。

### その3: タレント

氏のいう「タレント」と「スペシャリスト」などの違いは、「知識」の考え方。すなわち「知識」を生み出すことを目的として働く「スペ

KM 2-23 「知識労働者」の類型



シャリスト」に対し、「タレント」はそれを手段として組み合わせ、より上位の目的を達成する非定型労働者です。

このコラムですでに取り上げた、「事業デザイナー」がその典型例。この分野の先駆者、駒澤大学の井上智洋先生の表現を借りれば、それは「クリエイティビティ(創造性)系」と「マネジメント(経営)系」の能力を併せ持つ「タレント」です。

井上先生のいうもう一つの「ホスピタリティ(もてなし)系」の能力を含めて考えれば、AI 時代に生き残る「ホワイトカラー」とは、「創造性」を核とする「事業力」か、「共感性」を中心にした「人間力」のいずれかを徹底的に磨き、さらにそれをマネジメントできる労働者。もちろんその両方を修得していれば鬼に金棒です。

先進国の中で、AI ではすでに周回遅れとなった我が国において、人間の「知識労働」で後れを取れば、それこそ致命傷になります。それに対する「個人」の意欲や能力の劣化が、各種の調査をつづじて続々と明らかになる中、いま企業のミドルが核となって進めなければならないのは、集団「タレント」化。そのヒントは、先行するスポーツや芸能界にあり！我が国のビジネス分野は、俗に「タレント」と呼ぶ業界にすら、大幅に後れを取っているのです。

平成30年10月22日 実空